

## オクシタニーとは何か ード・ゴール体制からミッテラン政権下における 南フランス地域主義運動からの考察一

金子 明日香

Cette étude considère le régionalisme dans le sud de la France, notamment le mouvement occitan dans les contextes du gaullisme et de la décentralisation à gauche.

Quelle est l'Occitanie telle que les occitanistes la définissent? Est-elle identifiée au Sud ou au Midi? Est-elle unitaire ou divisée? Cette étude tente de répondre à ces questions en analysant les discours et le sens du mouvement occitan. Par ailleurs on tentera d'examiner les perspectives d'avenir du mouvement occitan et, plus généralement, du régionalisme dans le sud de la France.

Sous le gaullisme le mouvement occitan était opposé à la république, c'est-à-dire au centralisme, et cela a contribué à renforcer l'unité de l'Occitanie. Passé le gaullisme, lorsque François Mitterrand a pris le pouvoir, la république a renoncé au centralisme traditionnel. Mais de même coup, l'absence de bouc émissaire risque de priver l'Occitanie de son unité.

### はじめに

オクシタニー (Occitanie) の占める領域はどこか。オクシタニーとは、ロワール河以南の32県に広がり、フランス全国土の面積の35%を占め、かつてはオック語という言語が話されていた地域である。つまり、地理的には、南仏にあたる。南仏を指す言葉には Midi という言葉もあるが、この領域をオクシタニーと規定し、1960年代、70年代に激しく展開された地域主義運動をオクシタン運動 (le mouvement occitan) と言い、それはオクシタニスト (occitaniste) と呼ばれる活動家たちによって担われてきた。

とはいえ、このオクシタニーという領域は、現在のフランスの行政単位である地域圏 (région) として存在しているわけでもなく、また旧体制下の行政単位であった、州 (province) として存

在したこともなく、さらには歴史上、一度も王国あるいは公国としても存在したこともない。それにもかかわらず、このオクシタニーをひとつの共同体とし、ド・ゴール体制を批判する形で運動は展開されてきた。だが、ミッテラン政権の誕生を期に、運動の士気は低下し、その推進力も弱まり、オクシタニーという共同体の虚構性を突きつけられることになった。

政治史に一度も存在したことの無い、このオクシタニーという共同体とは何であったのか。本稿では、オクシタン運動をフランス政治との関係で捉えようとするものだが、とりわけ、ド・ゴール体制やミッテラン政権との関係からその動向を探り、南フランスの地域主義におけるオクシタン運動の意義と可能性を問うことにする。

## 1. 先行研究

オクシタン運動の先行研究として、第一に挙げることができるのは、アラン・トゥレーヌ他『現代国家と地域闘争—フランスとオクシタニー』<sup>1</sup>である。トゥレーヌら、フランスの社会学者がチームを組み、アンケート調査といった手法には頼らずに、オクシタン運動の活動家と運動の敵対者とを対話させ、自己分析をさせるという社会学的介入 (intervention sociologique) という手法を用いたものである。この研究においては、オクシタン運動を統一しようとするすべての試みが挫折に終わったと指摘されている。もう一つは、アンリ・ジャンジャンの『ユートピアからプラグマティズムへ?』<sup>2</sup>である。著者自身はオクシタニー出身ではあるが、オーストラリアの大学で論文を書き、オクシタニストへの3回にわたるアンケート調査をもとに研究し、オクシタニー共同体の神話性を指摘し、いまや運動がユートピアを目指した統一的な運動を目指すのではなく、運動が多様になってきたことを指摘している。

オクシタニーのアイデンティティについての研究としては、中嶋茂雄の「南フランスの地域アイデンティティ—オクシタニズムを中心に」<sup>3</sup>とピエール・ラヴェルの「表象としての国民—南仏かオクシタニか」<sup>4</sup>の論文がある。両者ともに、南仏のアイデンティティの在り方を、オクシタニズム (occitanisme) をもとに論じている。また、南仏社会における社会的結合関係 (sociabilité) について詳しく論じたものに、モーリス・アギュロンの『プロヴァンスにおける社会生活』<sup>5</sup>がある。

地域言語について扱ったものとしては、教育状況についてまとめたアンリ・ジオルダン編の『虐げられた言語の復権—フランスにおける少数言語の教育運動』<sup>6</sup>や田中克彦、H・ハールマンの『現代ヨーロッパの言語』<sup>7</sup>がある。特に、オクシタン語に言及したものについては、佐野直子の論文『「少数言語」の新しい在り方—オクシタン語の場合』<sup>8</sup>がある。

ヨーロッパ統合に伴う近年の地域主義の動向を広い視野のもとで扱ったものに関しては、梶田孝道の『統合と分裂のヨーロッパ—EC・国家・民族』<sup>9</sup>がある。この著書においては、ヨーロッパの統合に伴い、ヨーロッパ・国家・地域の3つの帰属集団が出現するという「三空間併存時代」が提唱されている。バルムの『新地域主義の政治』<sup>10</sup>およびグランリュの『ヨーロッパ、地

域の時代』<sup>11</sup>においては、ヨーロッパ統合に伴い生じた、国境を超えた地域間の提携について言及されている。また、オクシタニストの第一人者であるロベール・ラフォン（Robert Lafont）は、『我々、ヨーロッパの人々』<sup>12</sup>および『民族、国家、地域』<sup>13</sup>といった著書で、ヨーロッパの歴史、ヨーロッパにおける地域という視点から地域アイデンティティや地域経済について言及している。

## 2. オクシタニズムの発展段階

まず、オクシタニーとは何かを探るにあたり、ド・ゴール体制期までの、オクシタニズムの発展過程を考察したい。

(1) 南フランスにおける地域主義運動の始まりは19世紀にまで溯り、その覚醒は、フェリブリージュ（Félibrige）と呼ばれる文学結社に求めることができる。

1854年、後に叙事詩『ミレイユ』によりノーベル文学賞を受賞することになるフレデリック・ミストラル（Frédéric Mistral）を中心としてアヴィニヨンの7人の詩人たちによって、プロヴァンス語及びプロヴァンス文学の復興を目指すフェリブリージュ文学結社が設立される。これに関して、マンフォードの指摘がある。「フェリブリジストたちがプロヴァンスの言語と自立的な文化生活を再建するためにはじめて集会を開いたのは1854年であった。これこそ、それ以後ゆっくりとはしているが、着実に成長した地域主義運動の意識的開始を画するのでもある」<sup>14</sup>。19世紀の後半、国家主義的傾向が強まるなか、彼らの運動は、南フランスのみならず、世界における地域主義運動そのものの幕開けともいえる意義を有していた。

フェリブリージュが誕生したのはフランス第二帝政期（1852～1870）であり、それは、第三共和制期（1870～1940）から、ヴィシー政権（1940～1944）が崩壊するまで活発に活動していた。第二帝政から第三共和制期までの時期は、フランス革命神話の完成期であり、中央集権主義が強化された時期でもあった。とりわけ、第三共和制期においては、「唯一にして不可分の共和国」を特徴とし、フェリー法によって初等教育の義務化が規定されていた。この義務化された初等教育においては、もっぱらフランス語で教育が行なわれることが定められていた。フェリブリージュの活動が、ロマン主義の影響のもとで懐古主義的な側面を持っていたことは否めないが、このような時代のなかで、プロヴァンス語の復興を目指し、南フランスの連邦主義を志向したフェリブリージュの動向は、必然的に反中央集権的なものとなったのである。

フェリブリージュには、多数派を占める「フェリブリージュ・ブラン」とよばれるカトリックで王統派に属する右派と、少数ではあるが、「フェリブリージュ・ルージュ」と呼ばれる、共和主義に属する左派とがあった。ミストラル、そしてアクション・フランセーズの創始者で知られるモーラスは、右派に属し、南フランスの連邦主義を主張しつつも、愛国主義者でもあった。一方、パリ・コミューンにも参加した、フェリブリージュの代表的人物に、プルードン主義者でモンベリエの詩人、ルイ・グザヴィエ・ド・リカール（Louis-Xavier de Ricard）がいた。

アルマンゴードによれば「彼はフェリブリージュ・プランに敵意をいだいており、フランス共和国とは連邦として結び付く、共和的・急進的・社会主義的オクシタニーを切望している。リカールは、このように、今日におけるすべてのオクシタニストの政治的意見の起源である」<sup>15</sup>。彼は、フェリブリージュのメンバーではあったが、政治思想的にはオクシタニストとしての最初の人物とみなすことができるのである。

(2) その後のオクシタン運動、そしてオクシタニーという共同体の形成に大きな影響を与えることになる出来事が生じる。1907年のラングドック地方におけるブドウ栽培農民による運動である。アルジェリアからのワインの流入により起こった価格暴落に対する抗議であったが、ナルボンヌ市長であり、社会主義者でもあった、エルネスト・フェルールは (Ernest Ferroul)、この運動を南仏 (Midi) のレジスタンスとみなし、アルピジョワ十字軍に言及することによって、南仏人としての意識を喚起した。

一方、ミストラルに対しても、このブドウ栽培者の運動に参加するようにとの要請がなされたものの、彼は、同じ日にフェリブリージュの祭典へ出席をしなければならぬことを理由に、参加を断っている。つまり、フェリブリージュは連邦主義を唱え、プロヴァンス語の復興を目指したものの、民衆とは距離を置き、政治運動までには至らなかったのであった。

だが、この運動において、フェルールは地域主義者の先駆けと評価されることとなる<sup>16</sup>。1907年のブドウ栽培者の運動は広域的に運動が拡大し、アルピジョワ十字軍にも比較され、南仏人としての意識が喚起されていった。運動はオクシタニー内の14県によって支持され、「パン・オクシタニーとしてのある種の結合が生じたのであった」<sup>17</sup>。この運動は、のちにド・ゴール体制下において活発化するであろう文化・社会・経済闘争をもとりこんだオクシタン運動の先駆けとも言えるのである。

1931年にはカタルーニャが自治権を獲得したということもあり、この動きの影響をうけ、1935年には、左派に属するオクシタンの初の政党であるプロヴァンス党 (Parti Provençal) が結成される。党結成の表明は、雑誌 *Occitania* においてなされた。オクシタニストたちの雑誌のタイトルにおいて、*Occitania*<sup>18</sup> という呼称が用いられたのは、恐らくこれが最初である。後に南仏において広く共有されることになるオクシタニーという意識が喚起された最初であった。一方、フェリブリージュの代表的存在であるミストラルは、南仏を指す際には Midi のみを用いていた<sup>19</sup>。プロヴァンス党により、「少数民族」、「フランス帝国主義」、「フランス植民地主義」という概念がもたらされるようになったのだが、このプロヴァンス党のメンバーであり、*Occitania* の指導者でもあった、シャルル・カンブルール (Charles Camproux) は、彼の著書『オクシタン陣営のために』 (*Per lo camp occitan*) において、ルイ・グザヴィエ・ド・リカール以来最初の、オクシタニストとしてのディスクールを確立した。カンブルールは、反ファシズムを掲げ、国家による帝国主義打倒のため、国内的にも国際的にも連邦主義を奨励し、経済においては地域圏を基軸とした経済体制を唱えたのであった。カンブルールは同じくオクシタニストであるルーケットという人物と共に、スペイン内戦が起こった1936年に「我々の故郷としては理想的な統

合体であるオクシタニー以外の故郷を我々は知らない]<sup>20</sup>と表明した。徐々にオクシタニーという共同体が表出しつつあった。カンブルーによって、若き左派のオクシタンたちがオクシタニズムに引き付けられたのであった。カンブルーのディスクールは、第二次世界戦後のオクシタニズムの基礎となり、その歴史における大きな足跡を残したのであった<sup>21</sup>。

プロヴァンス党の設立には、カタルーニャの組織であるEsquerra republicana de Catalunyaの影響があり、オクシタニストがカタルーニャの知識人と接触を持つこともあった。とりわけ、1923年に創刊された雑誌 *Oc* によって、カタルーニャ運動家との関係の強化がなされる。彼らとの交流のすべてがうまく行っていたわけではないが、1931年から1939年まで両者の接触は続いた。1931年のカタルーニャの自治権獲得にオクシタニストたちは熱狂し、その後の1936年のスペイン内戦においても、カタルーニャ運動家を支援したのであった。

ヴィシー政権期（1940～1944）におけるオクシタニズムは、国民革命の影響下にあり、オクシタニズムとしての表明ができず、まるでフェリブリージュの様相を呈していたという<sup>22</sup>。だが、フェリブリージュのメンバーがペタン元帥をフェリブリージュの名誉会長に迎え、ヴィシー政権に順応したのに対して<sup>23</sup>、オクシタニストたちはレジスタンスへと結集していくことになる。とはいえ、レジスタンスのイデオロギーは、地域主義というよりはフランス・ナショナリズムによるものであった<sup>24</sup>。しかし、トゥールーズでは、オクシタニーの連邦を志向した者たちもあった。ヴィシー政権の崩壊とともに衰退したフェリブリージュとは異なり、フランス解放の後、トゥールーズのオクシタニストたちは、レジスタンス参加の正当性に頼りつつ、オクシタン研究院 (Institut d'Études occitanes) を設立することになる。

### 3. フランス政治とゴースム

地域主義というものが、国民国家の存在を揺るがす恐れのあるものである以上、反中央集権主義を標榜するのは当然のことではあるが、フランスにおいてオクシタニズムが発展したのはド・ゴール体制というコンテキストのなかにおいてであった。ではオクシタニズムの発展を促すことになったゴースムの特徴とはどのようなものであったのか。

まずは、ナショナリストとしてのド・ゴールの国家観を挙げる必要があるだろう。彼は、対外的にも、対内的にも、フランス国民国家を絶対視したナショナリストであった。対外政策においては、ヨーロッパ共同体や北大西洋条約機構に加入することは自国の運命を他の国家にあずけることであると考えていた。内政面においては、彼は国内に存在している諸集団に対して否定的な態度をとった。唯一不可分のフランス国民国家の利益を脅かし、特殊利益を追求する団体—彼の言葉では「封建勢力」と呼ばれる—の存在をド・ゴールは一切認めなかった。ド・ゴールはフランス国民国家の利益のために、国家と個人の間には存在する中間的団体を認めなかったのである<sup>25</sup>。彼のナショナリズムの理論からすれば、フランス国民国家のなかに、オクシタンという民族の存在は認められないのである。

次に、第四共和制期における植民地政策の問題がある。とりわけ、アルジェリア問題は、分離独立を掲げるオクシタン民族主義党 (Parti Nationaliste Occitane) に影響を与えることになる。この党は、オクシタニーをフランスの「内部植民地」とみなし、このことから、フランスのアルジェリア政策に反対し、アルジェリアの民族解放戦線に支持を与えた。しかし、ド・ゴールがアルジェリアの独立を推進したことに対しては、評価を与えていた。

ド・ゴールが「中間団体」を否定していたからといって、フランス国家内の地域の存在が全く無視されていたというわけではなく、パリ一極集中型の経済活動に対する反省から、地域開発にも目が向けられるようになった。そのため、地方への工業の分散化を目指し、1963年には国土整備地域経済活動庁が設立される。1964年には、経済均等発展計画に従って、フランス国土は21の地域圏に編成された (1970年には、コルシカがプロヴァンス=アルプ=コート=ダジュールから分離して22地域圏になる)。フランス革命以来の県制度を超越した新しい行政区分の登場であった。しかし、フランス革命期のジロンド派や連邦主義、さらには第三共和制の王党派のように、「唯一にして不可分の共和国」の理念に対抗する民族的連帯を呼び覚ますことを恐れて、ド・ゴールは旧体制下の州とは異なった地域圏区分を設定したのである。だが、地域圏は地方自治体に昇格されることはなかった。その地域開発も、中央から派遣されたテクノクラート主導の開発に過ぎず、彼らによる南フランスの経済開発は、第三次産業、とりわけ地中海沿岸の観光開発であり、工業や伝統産業であるブドウ栽培への対策は立ち後れていた。結果として、地域の伝統産業は衰退し、パリ資本の進出を促す結果となった。これが一連のオクシタン運動を促す契機となる。

1968年の、「自主管理」と「反テクノクラシー」を掲げた五月革命は、左翼が中央集権主義から脱却し、地域主義の推進者となる契機となった。社会党は、「自主管理」運動のなかに活路を見出し、自らの再建をはかったのであった。社会党が採択した自主管理思想は、ド・ゴール体制下の国土整備政策による伝統産業の崩壊、パリ資本への従属、そして、地域格差によって生じた地域住民の「相対的剝奪感」、パリからの文化侵入による地域固有の文化の破壊を経験した周辺地域において適用されることとなり、とりわけ、ミシェル・ロカールが、自主管理と地方分権化を強調し、左翼と地域主義運動を結び付けていく。共産党へも地域主義思想が浸透していき、1972年には左翼共同政府綱領において、左翼の地方分権化への取り組みの意図が明らかにされるのである。こうして、ド・ゴール体制を批判すべく、オクシタン運動とフランス左翼政党とが、五月革命以降、結び付けていくことになる。

#### 4. オクシタニー意識の喚起

ナチスドイツからのフランス解放直後の1945年、トゥールーズのオクシタニストを中心になされたオクシタン研究院の設立は、カタルーニャ研究院をモデルにしたものであった。しかし、オクシタン運動のモデルともいえるカタルーニャが、カタルーニャ民族主義を守り続けている

のに対して、オクシタニーはフランスナショナリズムのなかに抱合されてしまっており、オック語文化はフランス文化の一要素という位置づけであった。加えて、オクシタニズムには文化主義に徹するのか、それとも、政治・経済・行政の問題をも取り入れるのかという矛盾があった<sup>26</sup>。

変化が生じてくるのは、アルジェリア戦争（1954年）の頃からである。オクシタニストたちは、フランスによるアルジェリアの植民地化に対して批判的であった。1959年にはオクシタニストのフランソワ・フォンタン（François Fontan）によってオクシタン民族主義党が設立される。これは、アルジェリアの状況に触発されてのことであった。フォンタンはインターナショナルリストであり、アルジェリアの独立を支持し、同時にオクシタニーの独立を訴えた分離主義者でもあった。オクシタニストたちは、アルジェリアの植民地化に対して批判的であったものの、分離主義を支持したのはオクシタン民族主義党だけで、オクシタニストのなかでは少数派であった。第二次世界大戦後のオクシタニストの第一人者ともいえるロベール・ラフォンを中心として、オクシタニストたちはむしろ自国内での自治を要求することを主張した。だが、アルジェリア問題の解決を契機に、ド・ゴール体制が定着するにつれ、オクシタン運動は大きく発展していくことになる。

ド・ゴール体制期において、オクシタニー意識を喚起することに貢献した運動が3つある。①1961年から1962年にかけてのドゥカズヴィル鉱山閉鎖反対運動、②1970年のラルザック軍事基地拡大反対運動、③1975年から1976年にかけてのラングドックにおけるブドウ栽培者の運動である。

(1) ドゥカズヴィル鉱山閉鎖反対運動においては、鉱山の閉鎖を見越して労働者の人員整理が成されてきたことに対して、鉱夫たちはそれを「パリのテクノクラートによる地域の攻撃としてこれをとらえたのである」<sup>27</sup>。この地で生計を立てたいと考えてきた鉱夫たちは、オクシタン語で歌い、書き、鉱山の閉鎖の阻止を訴え、さらにオクシタニストたちがこの運動に介入したのであった。オクシタニストと鉱夫、そして地域住民が初めて結び付いたのみならず、彼らはフェリブリージュの限界を乗り越えるべく、社会・経済運動をもオクシタニズムのなかに取り込んだのだった。それはオクシタニストたちが論争から実際の運動へ身を投じた最初であった。

この運動においては「国内植民地主義」(colonialisme intérieur)というテーゼが提起された。それは、国家によるオクシタニーの地域産業の解体とオクシタニーの国家への従属に対する抗議を示していた。オクシタニーの低開発化と周縁化が問題とされたのである<sup>28</sup>。

ドゥカズヴィルの鉱山閉鎖反対運動の後、ラフォンを委員長に、オクシタン調査活動委員会(Comité Occitan d'Etudes et d'Action)が設立されることになる。オクシタン調査活動委員会による地域圏の定義は新たなもので、県の制度、地理学者の定義による地域圏、政府による計画化された地域圏、これら3つの分割形式をすべて批判していた。委員会は「オクシタニーは諸地域圏の文化的公分母」とし、「オクシタニズムは諸地域にとって普遍的となるべき方

式と意図」と定義したのであった。

オクシタン調査活動委員会はオクシタン研究院から端を発したものであるが、オクシタン研究院が言語活動に主眼を置いていたのに比べれば、オクシタン調査委員会は政治的運動への介入を志向していた。この委員会は労働組合と接触をはかり、オクシタニーにおける階級闘争を分析し、さらに、ミディ・ルージュの伝統<sup>29</sup>から、左翼と接近していく。

「自主管理」と「反テクノクラシー」を掲げた1968年の五月革命以降、左翼政党が自主管理社会主義を掲げ、自主管理と地域主義とを結び付けることによって、ますます、オクシタニストと左翼の連携が深まることになる。

その後、1974年にはラフォンを中心に、オクシタン語で「自分のくんに生きたい」という意味を持つ、プレム・ビュレ・アル・パイス (Volèm viure al país) という組織が登場し、左翼と提携する路線を取り、さらにラフォンは1976年には『オートノミー、地域から自主管理へ』(Autonomie, de la région à l'autogestion) を著し、左翼の掲げる自主管理思想とオクシタン運動とを結び付けていく。

(2) このような、左翼とオクシタニストとの提携のなかで、1970年には、オクシタニー意識が表出した第2の運動である、ラルザック軍事基地拡張反対運動が生じる。それは軍の演習地拡張に反対して農民が運動を起こしたものであるが、もともと農民たちは外部の運動に対しては閉鎖的であり、当初からオクシタンの要素を有していた運動ではなかった。しかし、最終的にはオクシタニストの主張が通って、オクシタンのアイデンティティが受け入れられることになる。この運動においては、「我々はラルザックを守る」(Gardarem lo Larzac) とオクシタン語での主張が掲げられたのであったが、このスローガンはオクシタニーのかかなりの領域において用いられた。

(3) そして、第3の運動が、1975年から1976年にかけて生じた、ラングドックのブドウ栽培者の運動である。ラングドックにおいては1907年にもブドウ栽培者による運動が生じており、この時の運動においてすでに南仏人の意識が喚起されていた。イタリアからの安価なワインの流入および、アルジェリア産ワインの大量流入がラングドックのブドウ栽培農民へ打撃を与えていたのであり、運動はこれに対する抗議行動だった。運動のリーダーの一人であるマッフル・ボージェは、運動のオクシタン性を主張した。この運動においては、赤地に独特の形をした十字架をあしらった、オクシタニー十字の旗が翻り、「プレム・ビュレ・アル・パイス」(自分のくんに生きたい) のスローガンがかかげられた。

オクシタニー意識を喚起する運動は、「国内植民地主義」にはじまり、左翼との提携をとりながら、常に、ゴースムを批判し、地域対国家という二元性のなかで運動を展開してきた。国家がオクシタニーにとってのスケープ・ゴートであったからこそ、それに対抗してオクシタニー意識が表出し得たのではないだろうか。だが、ブドウ栽培者の運動は政府によって輸入制限の提案が出されると同時に動員力が弱まり、1978年に左翼連合が崩壊すると、これと提携していたプレム・ビュレ・アル・パイスも内部分裂を起こし、衰退する。結局、オクシタニーは民族



政党を持つだけの力がなく、むしろ、ミディ・ルージュともいうべく、左翼と提携し、国家に対して抵抗するだけの力しか持ち得なかったのかもしれない。これらのことは、オクシタニーの共同体としての弱さを物語るものなのだろうか。

## 5. オクシタニーとは何か

1978年の左翼連合の崩壊を契機にオクシタン運動は衰退するのであるが、それは何よりもまず、オクシタニーという共同体の虚構性を際立たせる結果となった。オクシタニストのディスクールにおいて、オクシタニーやオクシタニズムの定義は明確に示されてこなかった感がある。何をもってオクシタニーを一つの共同体と見なすのか、説得力のある強い主張は示されてこなかったように思われる。オクシタン調査活動委員会は、「オクシタニーは諸地域圏の文化的公分母」であり、「オクシタニズムは、諸地域にとって普遍的となるべき方式と意図」であると示しているものの、結局、オクシタニーの共同体の定義は、ラフォンが「オクシタニーは、*langue d'oc* という属性のもとに、ロマンス語方言の類似性が構成しうるロマンス語方言の使用領域をさす」<sup>30</sup>と言ったように、言語によってのみ規定された。この *langue d'oc* とは、中世フランスにおいて、南部では「はい」を *Oc* と言い、北部では *Oil* と言ったことから、南仏は *langue d'oc* (オックの地)、北仏は *langue d'oïl* (オイルの地) とされた対概念であった。*langue d'oc* はオック語圏であり、*langue d'oïl* はオイル語圏、つまりフランス語圏ということになる。ラフォンはまた、「*langue d'oc* と *Occitanie* は同義であり、同じ領域を示すものとして、13世紀の末同時に現れた」<sup>31</sup>と言っている。つまり、*langue d'oc* と *Occitanie* を同じものとして捉えているのである。では、オクシタニストたちは、なぜ、*langue d'oc* ではなく *Occitanie* という呼称を用いることになったのか。

しかも、ラフォンによれば「*langue d'oc* は唯一不可分であるとは誰も主張していない」<sup>32</sup>。オック語は主に、3つのグループから成る。第1に、北部のリムーザン語・オーヴェルニュ語・アルプ＝プロヴァンス語、第2に、中部のラングドック語・プロヴァンス語、第3に、ガスコン語から成るのである。話されている言語によってオクシタニーを規定できたとしても、その言語は多様性を含んでおり、言語によってオクシタニーを規定したとしても、オクシタニーの共同体としての一体性は弱いものとならざるを得ないであろう。オクシタニーとは何かとの問いに、アルマンゴードは「実のところ、我々は、この言葉から、オック地方の総体、つまり同じ言語と文化を持つ地方の総体であると理解している。それ以上でも、それ以下でもない…」<sup>33</sup>と答えを出している。オクシタニーの持つ多様性とその一体性という矛盾を、オクシタニーの独自性として捉えているようである。だが、結局のところ、オクシタニーを規定するのは、オック語のみであり、その歴史の始まりもオック語がそのものとして存在した時であると言うだけで<sup>34</sup>、ラフォンたちの主張は言語だけにオクシタニーの存在を正当化させる極めて曖昧なものでしかないのである。

オクシタン運動が最盛期であった1960年代と70年代のオクシタニストのディスコースには、オクシタニーという共同体の現実性について考察したものが見受けられない。「オクシタニーは常にオクシタニズムのなかにあった」<sup>36</sup>という当時のラフォンの表現は、オクシタニーの一体性というものが、現実には即したものであるよりも、オクシタニストの主張のなかにある幻想であるということ、如実に物語っているのかもしれない。

## 6. ミッテラン政権誕生とオクシタニズムの変化

1978年の左翼連合の崩壊に伴い、オクシタン運動にも分裂が生じ、運動は衰退するのであるが、その3年後の1981年にミッテラン社会党政権が誕生する。新しい政権の登場それ自体は、当初、最も急進的なオクシタン・ナショナリズムの傾向を持つ雑誌『今、ここに』(*Aici e Ara*)を除いては、オクシタニストの多くに歓迎されたようである<sup>36</sup>。ミッテラン政権が誕生した翌年の1982年、オクシタニストのみならず、フランスの地域主義者たちの多くが望んできた地方分権化法<sup>37</sup>が成立する。ミッテラン政権の地方分権化政策の特徴は、地方分権化(décentralisation)と地域化(régionalisation)であり<sup>38</sup>、地域主義者たちの要求が反映されているかのようだが、皮肉にも、オクシタン運動を活気づける契機とはならなかった。

フェリブリージュを含め、オクシタニストたちは、フランス革命以来の中央集権国家体制に対して異議申立てを行ってきた。国家がこの伝統を放棄したということは、これに対して戦いを挑んできたオクシタン運動にとってインパクトを与えるものであったことは確かである。「フランスにおける中央集権化された現代国家の成立と(中略)マイノリティ側の要求や主張との歴史的同時性は、冷静に考えると、指摘せざるを得ない」<sup>39</sup>とオクシタニスト自身、認めている。つまり、国家と敵対関係にある時において地域主義の運動が成立するという、皮肉な現実を突きつけられたのであった。あるいは、国家がオクシタン側の要求を受け入れないという状態であるからこそ、運動が強化されるのである。特に、オクシタニーのように、共同体の一体性が不明確なものである場合、国家というスケープゴートがあつてこそ、一体性が保てるという側面がある。

しかし、ミッテランの地方分権化法は、地方分権と地域化をその目玉としているにもかかわらず、実態は、地方分権というよりは地方への事務分与に過ぎず、中央政府による地方公共団体の監視を同時に強化していた側面もあった。また、地方分権化法によって地方公共団体に昇格した地域圏は、1964年の経済均等発展計画によって制定されたド・ゴールの地域圏をそのまま採用したものであり、民族的連帯を想起させないように、旧体制下における州とは異なる区分を持つ地域圏をそのまま地方公共団体に昇格させたに過ぎなかった<sup>40</sup>。オクシタニーは1つの地域圏ではなく、7つの地域圏に分断されたのであった。

ミッテランの社会党がフランス革命以来の中央集権主義という伝統を放棄したとはいえ、上記のように、地方分権化法が見かけ倒しにすぎない部分がある。これへの批判が、再び運動を

活性化させる契機になるのではないか。実際、地方分権化法が制定された翌年には、オクシタニストによる地方分権化法の実態に対する批判が出されている<sup>41</sup>。しかし、次のような意見もある。「1982年3月の地方分権化法は、たとえそれが表面的なものであるにせよ、フランス国家の中央集権主義を批判するオクシタニストの言説の影響力を弱めることができたのだ。それは、地方分権化法が1789年以来受け継がれてきたフランスの中央集権主義との最初の断絶であったからだ<sup>42</sup>、「地方分権化は、多くの点で我々を出し抜いた。地方分権化により、中央集権主義に対する我々の批判が、さほど適切、正当なものとならなくなった<sup>43</sup>。たとえ、地方分権化法が、見かけ倒しのものに過ぎないとしても、国家が中央集権主義の伝統を放棄した以上、批判の矛先が失われたことに変わりはない。

しかも、オクシタニーの7地域圏への分断が、オクシタニズムおよびオクシタニーの分断化に一層拍車をかける。「ドゥフェールの改革が地域圏を（中略）単なる行政上の分断以外の何物でもなくしているが故に、ますます、同じ様相をもたず、同じ闘争性を持たない地域間の異相性が、今や露呈している<sup>44</sup>。結局、地方分権化法は、オクシタニーの虚構性を一層際立たせる結果にしかならなかった。

1980年代以降、オクシタン運動の崩壊と、地方分権化法によってあらわにされたオクシタニー共同体の「神話性」を認識し、オクシタニストたちによる新たな分析が試みられるようになった。オック語という共通言語によって規定されるオクシタニーといった、共同体の現実性への考察を欠いた分析を脱し、オクシタニーという領域への冷静な考察がオクシタニストによってなされ始めるのであった。1970年代まではオック語によって規定されるオクシタニーの妥当性を訴えてきたラフォンが、le 〈continent〉 occitan（オクシタン大陸）という言葉でオクシタニーを語り、オクシタニーという定義は今日では失敗であったと認めている<sup>45</sup>。オクシタニーは、エスニック・マイノリティの領域としては広すぎ、また、その地理や歴史もオクシタニー内の各地域で異なる。オクシタニー内の一地域圏であるアキテーヌが地中海世界というよりも大西洋世界に属しているように、オクシタニーは地中海世界にだけ属しているのではない。オクシタニストのマルテルは、「十年前の大オクシタニズムはもはや存在しない。しかし、複数のオクシタニズムが残っている<sup>46</sup>と明らかに、かつてのオクシタニーの一体性を否定しはじめている。

## むすびにかえて

では、ミッテラン政権になり、オクシタニーの虚構性が目立ちはじめ、その運動が力を失ったからといって、オクシタン運動は否定されるべきなのであるか。オクシタニーの一体性というものを、単なる虚構とのみ見なしていいのだろうか。しかしオクシタン運動がこの地域の言語であるオクシタン語への関心を生み、オクシタン・アイデンティティを共有させることになったのも確かである。オクシタニーは他の少数言語地域と異なり、Midi や Sud と呼ばれるよ

うに、かつては「もう一つのフランス」とみなされる傾向にあったが、いまやオクシタニーは、バスク・コルシカ等と社会言語学的には同等になった<sup>47</sup>。かつてのように Oc でも Midi<sup>48</sup> でも Sud でもなく、Occitanie と規定されるが故に、「もう一つのフランス」ではなく、コルシカ・ブルターニュ等と同様にフランスとは別の独自の文化をもった民族として認識されるようになった。Occitanie という呼称をオクシタニストたちが用いたのは、「もう一つのフランス」という対概念からの離脱を意味していたと言える。

地域主義のサイクルが、マンフォードが紹介しているように「詩と言語の復活にはじまり、地域的農業と産業の経済的促進計画、より自立的な政治生活の提案、学問と文化の地方的中心の建設努力で終わる」<sup>49</sup> というのであれば、フェリブリージュによって最初のサイクルである「詩と言語の復活」が担われ、オクシタニストたちによって第2のサイクルである「地域的農業と産業の経済的促進計画」が担われたと言うことができる。フェリブリージュやオクシタニストたちによって、南仏における地域主義は確実に発展させられてきた。オクシタン運動は第2のサイクルの段階で力を失ってしまったかに見えるが、EU 統合という動きに呼応するかたちでヨーロッパの各地では新たな地域主義が台頭している。この動きのなかで、オクシタニー内のラングドック・ルシヨンとミディ・ピレネーとカタルーニャの3地域を結ぶ国境を越えた地域間提携であるユーロ・レジオン (Euro-région) が形成され、より広域的な経済・文化活動が奨励されている。カタルーニャは、オクシタン運動にとってのモデルであり、互いに交流をしてきた地域でもある。この地域間提携にオクシタニストたちは期待をしている。地域経済の振興をここに託しているのである。また、1980年からは、カランドレート (Calandreta) というオクシタン語の自主教育組織が発足し、2001年現在で、37学校の開設にまで至っている。これらの状況は、上記の地域主義の3サイクルを確実に実現しているように思われる。オクシタン運動は、確実に南仏の地域主義運動の成長を促すものであったのである。

オクシタニー共同体の一体性に虚構の面があったとしても、そのアイデンティティの共有を促し、単なる北仏の対概念でもなく、また「もう一つのフランス」でもなく、むしろ積極的にオクシタニーを独立した存在にまで引き上げたこと、そして南フランスにおける地域主義の可能性の拡大に寄与したことにおいて、オクシタン運動は光彩を放つのである。

## 注

- 1 A・トゥレーヌ他著, 宮島喬訳『現代国家と地域闘争—フランスとオクシタニー』新泉社, 1984年。
- 2 Jeanjean, H., *De l'utopie au pragmatisme? (Le mouvement occitan 1976-1990)*, Llibres del Trabucaire, 1992.
- 3 中嶋茂雄「南フランスの地域アイデンティティ—オクシタニズムを中心にして」『現代ヨーロッパの地域問題と地域運動』昭和60~62年度科学研究費報告書, 1988年。
- 4 P・ラヴェル著, 傳田久仁子訳「表象としての国民—南仏かオクシタニか」『人文研究』大阪市立大学文学部紀要, 45巻9号, 1993年。
- 5 Agulhon, M., *La vie sociale en Provence intérieure au lendemain de la Révolution*, Société des Études Robespierriennes, 1970.
- 6 A・ジオルダン編, 原聖訳『虐げられた言語の復権—フランスにおける少数言語の教育運動』批評社, 1987年。
- 7 田中克彦, H・ハールマン『現代ヨーロッパの言語』岩波書店, 1985年。
- 8 佐野直子「『少数言語』の新しい在り方—オクシタン語の場合」, 田中克彦・山脇直司・糟谷啓介編『言語, 国家, そして権力』新世社, 1997年。
- 9 梶田孝道『統合と分裂のヨーロッパ—EC・国家・民族』岩波書店, 1993年。
- 10 Balme, R. (ed.), *Les Politiques du Néo-régionalisme*, Economica, 1996.
- 11 du Granrut, C., *Europe, le temps des Régions*, Librairie Générale de Droit et de Jurisprudence, 1996.
- 12 Lafont, R., *Nous, peuple, européen*, Kimé, 1991.
- 13 Lafont, R., *La nation, l'état, les régions*, Berg International, 1993.
- 14 L・マンフォード著, 生田勉訳『都市の文化』鹿島研究所出版会, 1974年, 353ページ。
- 15 Armengaud, A., Lafont, R. (eds), *Histoire de L'Occitanie*, Paris, Hachette, 1979, p. 762.
- 16 *Ibid.*, p. 782.
- 17 *Ibid.*, p. 783.
- 18 Occitania はオクシタニーのオクシタン語による表記であり, 発音は[uksitan'io]。Occitanie はフランス語による表記である。
- 19 Armengaud, Lafont, *op. cit.*, p. 772.
- 20 *Ibid.*, p. 858.
- 21 *Ibid.*, pp. 857-859; Lafont, R., *La revendication occitane*, Flammarion, 1974, pp. 244-246.
- 22 Lafont, *La revendication*, p. 252.
- 23 ヴィシー政権はアクション・フランセーズのモーラス, ミストラルの思想を準拠とし, オック語の教育にも寛大な措置をとり, 初等, 中等教育においてオック語の教育を認めていた。地域語教育に対するこのような措置は, フランス政府のなかにおいては, 極めて例外的である。これらのことから, フェリブリージュとヴィシー政権の結び付きは強かった。
- 24 Armengaud, Lafont, *op. cit.*, p. 864.

- 25 ド・ゴールのナショナリズムについては、櫻井陽二「フランス政治体制論—政治文化とゴリズム」芦書房、1985年の第四章「ゴリズムの原像—ドゴールのナショナリズムとリーダーシップ—」を参照。
- 26 Lafont, *La revendication*, pp. 256-257.
- 27 宮島喬「地域の生き残りと文化の活性化を賭けて—オクシタニーの場合」、宮島喬・梶田孝道・伊藤るり「先進社会のジレンマ—現代フランス社会の実像を求めて」有斐閣選書、1985年、75ページ。
- 28 ラフォンは、「国内植民地主義」という言葉がドゥカズヴィル鉱山閉鎖反対運動を契機にオクシタニストに用いられるようになったことを指摘し、地域圏の低開発化と国内植民地の状況を論じている。Lafont, R., *La révolution régionaliste*, Gallimard, 1967.
- 29 「赤い南仏」(Midi rouge) と呼ばれ、南フランスは伝統的に左翼の基盤の領域であった。
- 30 Lafont, *La revendication*, p 17.
- 31 *Ibid.*, p. 17.
- 32 *Ibid.*, p. 19.
- 33 Armangaud, Lafont, *op. cit.*, xi.
- 34 Lafont, *La revendication*, p. 22.
- 35 *Ibid.*, p. 260.
- 36 Martel, P., "Un peu d'histoire : bref historique de la revendication occitane, 1978-1988," *Amiras/Repères*, n°20, oct 1989, p. 19.
- 37 正式名称は、「市町村、県、および地域圏と自由に関する法」(La loi relative aux droits et libertés des communes, des départements et des régions) である。また、内務・地方分権相のガストン・ドゥフェールの名をとって、ドゥフェール法 (La loi Defferre) とも呼ばれる。
- 38 Philipponeau, M., *La grande affaire, décentralisation et régionalisation*, Calmann-Lévy, 1981, p. 17.
- 39 Hammel, E., "Les régions nouvelles et le fait occitan : Occitanie et décentralisation," *Amiras/Repères*, n°20, oct, 189. p. 113.
- 40 少数言語地域における地域圏の設定状況は以下の通りである。アルザスおよびコルスは言語・民族的区域とほぼ一致するかたちで地域圏が形成されている。ブルターニュは、言語・民族的つながりから、ブルターニュに含まれるべきロワール・アトランティック県が排除されるかたちで地域圏が形成されている。
- 41 Alliès, P., "Décentralisation : une réforme en trompe-l'œil," *Amiras/Repère*, n°1, jan, 1982, pp. 81-91. この年、*Amiras/Repère* が創刊され、「地方分権化 元年 (Décentralisation an1) という特集が生まれ、地方分権化法に対する厳しい批判がなされた。
- 42 Jeanjean, *op. cit.*, p. 86.
- 43 Coulon, C., "Mort et résurrection de monsieur occitanisme," *Amiras/Repères*, n°20, oct, 1989, p. 5.
- 44 Martel, *op. cit.*, p. 23.
- 45 Lafont, R., "La situation sociolinguistique de la France," Giordan, H. (ed.), *Les minorités en Europe : Droits linguistiques et Droits de L'Homme*, Kimé, 1992, p 154.

- 46 Martel, *op. cit.*, p. 23.
- 47 Lafont, "La situation sociolinguistique," p. 155.
- 48 「〈Midi〉は『一日の中間』『南』から転じて『地中海世界』を意味するようになっていた。それが革命によるフランスの統一の確立, ロマンティズムの流行, 国民国家の形成等を背景として, 指示する地域の範囲を地中海世界からフランス南部へと縮小し, 南フランスの再発見を経て〈Midi-Nord〉という対立概念として変化していった。南フランスを〈Midi〉としてとらえる用法を発展させたのはパリの歴史家やロマニストであり, 南フランス内部からの動きによるものではなかった」。中嶋, 前掲論文, 33ページ。
- 49 マンフォード, 前掲書, 360ページ。